今週の為替相場見通し（2021年1月18日）

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		103.53 ～ 104.40	103.88	103.00 ～ 104.80
ユーロ	（ドル）		1.2075 ～ 1.2223	1.2075	1.2000 ～ 1.2150
（1ユーロ=）	（円）		125.41 ～ 126.99	125.43	124.50 ～ 126.00
英ポンド	（ドル）		1.3451 ～ 1.3712	1.3588	1.3420 ～ 1.3670
（1英ポンド=）	（円）	*	140.34 ～ 142.26	141.10	139.00 ～ 142.00
豪ドル	（ドル）		0.7667 ～ 0.7805	0.7704	0.7600 ～ 0.7800
（1豪ドル=）	（円）	*	79.72 ～ 80.86	80.01	79.00 ～ 81.00

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

市場営業部　為替営業第一チーム　逸見 久貴

（1）今週の予想レンジ：　103.00　～　104.80　円

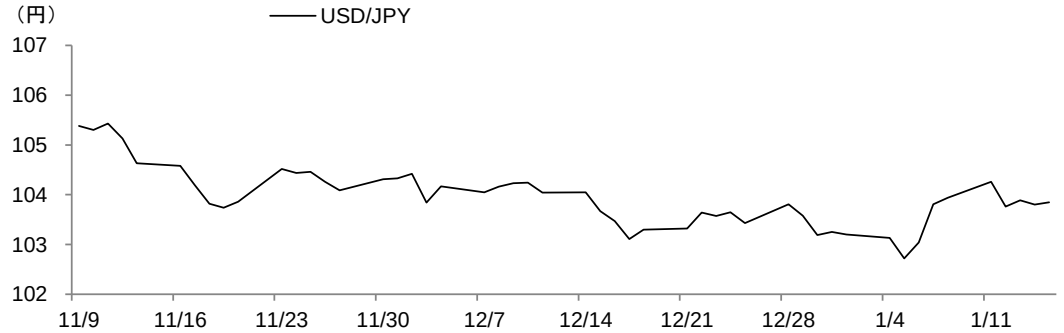
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は103円台後半を中心に上下する展開。週初、104円台前半でオープンしたドル/円は、本邦休場の中、米金利が堅調に推移したことで、週高値104.40円まで上昇。翌12日、ニューヨーク時間に米10年債入札の結果発表を控え買いが優勢となると、1.18％台に乗せていた米長期金利が1.13％)から台まで急落。また、銅や原油などの資源価格が上昇したことも相俟ってドル安の展開となり、ドル/円は103円台後半まで下落した。週央13日、前日の米金利低下の流れが継続し、東京時間の序盤に週安値103.53円まで下落。しかし、海外時間に入ると、堅調な株式市場を横目に104円手前まで反発した。14日、バイデン次期大統領の追加経済支援策が大規模になるとの期待感から、米金利が再び上昇すると、ドル/円も104円台前半まで上昇。ニューヨーク時間に入ると、パウエルFRB議長のハト派発言への警戒感からか米長期金利が低下し、ドル/円は103円台半ばまで下落。しかし、同議長からは足下の金利上昇やそのペースに対して特段懸念が示されなかったことで、米金利が反発。ドル/円も再度上昇したものの、104円手前で上値重く推移した。週末は、冴えない米経済指標が嫌気され、103円台半ば付近まで下落する場面もあったが、一巡後は再び103円台後半まで買い戻され、103.88円で越週した。

今週のドル/円は堅調な推移を予想。20日にバイデン氏が新大統領に就任し、迅速に追加経済支援策を議会で可決させられるかがポイントであろう。上院・下院ともに民主党となったことで楽観的な見方が広がり易く、米景気回復への期待感からドル/円が底堅く推移する展開を想定している。トリプルブルーとは言うものの、上院の議席数は半々のため、民主党内での造反を許さない状況だが、今のところ党内での反発については聞こえてきておらず、当該支援策が否決される可能性は低いと考えている。また、米金利は昨年3月のコロナ禍前の水準まで反発し、一服感が見え始めている。しかし、パウエル議長からは金利水準やその上昇ペースに対して特段の牽制がなかったことで、米金利が再度上昇する可能性はあると考えられる。そのため、支援策可決への期待感が高まるにつれ、上昇する米金利がドル/円のサポート材料となるであろう。

（3）先週までの相場の推移

先週（1/11～1/15）の値動き：　安値 103.53 円　高値 104.40 円　終値 103.88 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 グローバルFIチーム 大庭 泰典

(1)今週の予想レンジ: 1.2000 ～ 1.2150 124.50 ～ 126.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

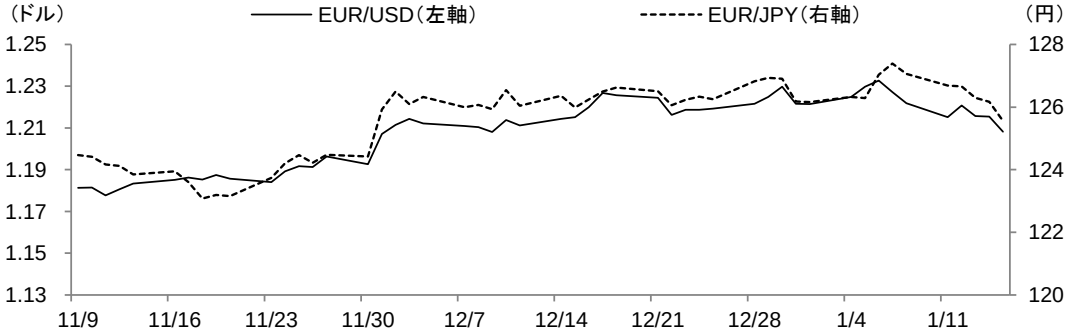
先週のユーロ/ドル相場は上値重い展開。東京休日の週初11日、1.21台後半でオープンしたユーロ/ドルは、米金利上昇に伴うドル買いに1.21 台前半まで下落したが、その後も大きな材料はなく上値が重い値動きとなった。12 日にかけても米金利の上昇が続いて、ユーロ/ドルは 1.21 台前半を推移したが、米10年債入札を絡んだ米金利低下を受けて、ドルが売られると1.22台前半まで値を戻した。13日には、前日の流れを受けてロンドン時間に一時週高値となる1.2223をつけた。しかし、イタリアの連立政権で少数政党のレンツィ元首相が連立政権からの離脱を表明し、複数の官僚も続いて政権を離脱したとの報道が嫌気されると、ユーロ売り・ドル買いの動きが強まって、1.21 台後半まで下落。その後は米金利低下を背景にしたドル売りに 1.2174まで戻すが上値は重く、1.21台半ばを推移。14日は、米景気対策への期待からドル買いが強まったほか、イタリア解散総選挙に対する懸念も燻って、1.2111まで下落した。その後は米金利低下を受けたドル売りに反転上昇し、パウエルFRB議長の「超緩和的な金融政策の出口について話す時期ではない」との発言もあり、ドル売りを受けて1.21台後半まで戻し、翌朝のバイデン米次期大統領の会見を控え、調整中心の動きとなり、1.21台半ば付近を推移した。前日の米景気政策の報道を受けて15日もドル買いが優勢となり、ユーロ/ドルは上値を切り下げ、1.21台を下回り水準を推移。米国休日を前に調整と思われるユーロ売りにじり安で推移し1.2075まで下落し、約1ヵ月ぶりの安値で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は引き続き上値の重い推移を予想。米国の1.9兆ドルの追加経済対策による景気回復への期待感が根強く、ドル買いが優勢となろう。週後半にECB政策理事会が開催されるが、12月に大規模な追加緩和を決定したこともあり今月は特段サプライズになるようなことは無く、無難に通過するだろう。先週のユーロ売りの材料となったイタリア政局の混乱には警戒が残るが、イタリアで総選挙が行われる可能性は低く、政治の混乱が起こるとは予想していない。今週火曜日の上院の信任投票でコンテ首相が信任を勝ち取り、他政党からの上院議員が与党に参加し過半数以上の新しい連立を形成することを予想されるが、ユーロが力強く買い戻されるほどではないだろう。1.20付近での攻防を予想する。今週は18日(月)EU財務相会合、19日(火)ユーロ圏11月経常収支、20日(水)ユーロ圏12月CPI(確)、21日(木)ECB政策理事会、22日(金)ユーロ圏1月製造業/サービス業PMIが控えている。

(3)先週までの相場の推移

先週(1/11～1/15)の値動き:

(対ドル)	安値 1.2075	高値 1.2223	終値 1.2075
(対円)	安値 125.41	高値 126.99	終値 125.43



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部　本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ:　1.3420　～ 1.3670　　139.00　～ 142.00　円

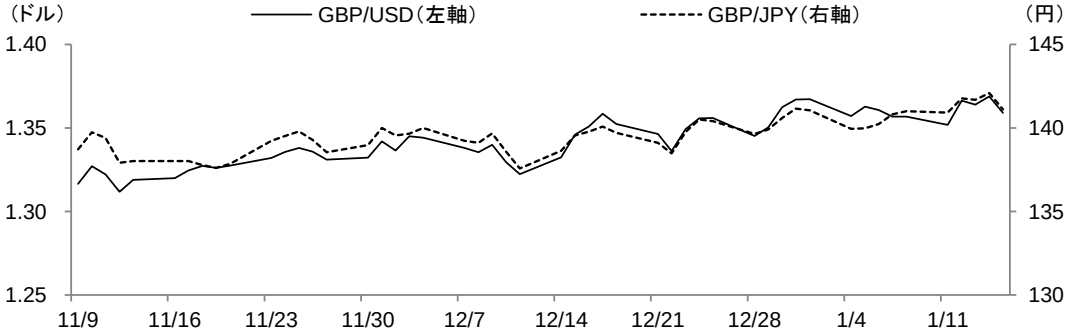
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、週明け10日こそ下押しが先行したが、程なく急反発、週引けに掛けて再び軟調に転じた。それでも、対ドルでは、結局、2018年5月来の高値圏における高止まりを維持。対円、対ユーロでは、それぞれ4か月ぶり、2か月ぶりの高値圏と言える水準にとどまった。週初のポンド安は、米長期金利続騰を受けたドル高の結果と考えられた。ただし、米長期金利が頭打ちから急反落に転じたのが12日の欧州市場引け前後からだったのに比し、11日のうちにポンドが底打ち反発してしまったり、対円でもポンド下押しが先行したりした事実は、米金利動向だけでは説明し切れない値動きと言えた(対ユーロでは下押しすることなしにポンド堅調がほぼ一方的に進んだ。12日には、英中銀ベイリー総裁が、「マイナス金利には問題が多い」との認識を示したことが、ポンド反発の要因に挙げられた。週引けに掛けては、14日、バイデン次期米大統領が発表した経済対策が「総額1.9兆ドル」と、巨額ではあるものの、予想の範囲内に落ち着いたことで、世界的な株価や商品価格が全般的な反落を見た。「期待で買って、事実で売る」この反応は、主要通貨市場では、ドル高や円高を誘い、ポンドも対ドル、対円では水準を切り下げる形で週の取引を終えた。

今週の英ポンド相場は、上値の重い膠着を予想。過去6か月余りの値動きを振り返れば、主要通貨市場の基調がドル安であるのは明確。それでも、足下、対円や対ユーロでも確かにポンドはこの間の高値圏と言える水準にあり、ポンドが堅調に推移しているのも紛れもない事実と言える。これは2016年6月の(EU離脱を決めた)国民投票以来、規模の増減こそあれ、脈々と仕掛けられてきたポンド売りの反動であろう。その背景には、昨年末にEUとの通商交渉が一応のまとまりを見せた事実や、名実共にEUを離脱した今年初来、恐れられたほどの混乱が見られていない安心感などがあるものと思われる。ただし、「通関手続きをしないまま英からオランダに運び込んだ荷物が没収された」「英国内で供給過剰になった漁獲をスコットランドの漁船がデンマークまで売り込みに行っている」などといった断片的なニュースを聞くだけで、現在までに大きな混乱が確認されないのは、年末年始の閑散に加え、新型コロナ禍の行動制限を受けて英/EU間の物流量が低下しているからに他ならない。EU離脱による物流の混乱の有無、その規模が確認されるのは、物流量が従来の水準を回復した時であり、少なくとも向こう数か月は見込み薄であろう。そのことは、もう一段のポンド反発も、失望に伴うポンド売りも、当面は想定し難いことを意味する。ただし、ここにきて再び、将来的な金融規制の不透明感を嫌って、米大手投資銀行などが人員や資産を大陸欧州に移転しつつあるといった報道が目についている。金融規制を巡る協議は、昨年末の通商合意には含まれておらず、これから本格的に始まろうとしている。金融大国としての英の命運に不透明感が漂う間は、ポンドの上値も重い状態が続くのではなかろうか。今週は、20日(水)に英12月CPI、22日(金)に英12月財政収支、同小売売上高などの主要英経済指標の発表が予定される。12月にロンドンなどで再発動されたロックダウンや、それに伴う財政支援などの影響を勘案する上で、財政収支や小売売上高は興味深いものの、ほとんどの主要国が行動制限や財政出動を導入する現状で、ポンドに明確な方向感を与える可能性は考え難いだろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(1/11～1/15)の値動き:　(対ドル)　安値　1.3451　高値　1.3712　終値　1.3588
(対円)　安値　140.34　高値　142.26　終値　141.10



(資料)ブルームバーグ

4．豪ドル

市場営業部　為替営業第二チーム　原田 和忠

(1)今週の予想レンジ:　0.7600　～ 0.7800　　79.00　～　81.00　円

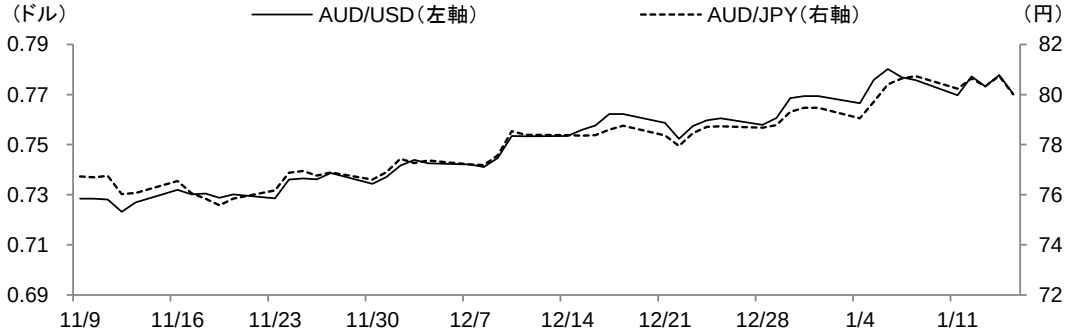
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場はもみ合いでの推移となった。11日、0.7750台で取引開始後、株価が反落する中、売りが優勢となった。欧米時間入り後も株式相場に利食い売りが継続。豪ドルは一時0.7660台まで下落したが、その後に戻して0.77近辺で引けた。12日、0.77割れで始まり、アジア時間は0.77前半で推移。米国時間では、米カンザスシティ連銀のジョージ総裁や米セントルイス連銀のブラード総裁が2021年の経済見通しについてポジティブなコメントを述べたことも追い風となり、センチメントが改善。豪ドルは0.77台後半まで押し上げられた。13日、0.7770台で取引開始後、アジア時間内は小動き。発表された豪9～11月求人件数が6～8月から23.4%増加し、前年同期比では12%増加となったが、相場ではあまり材料視されなかった。その後、欧米時間に入り米ドルが買い戻される展開に、豪ドルは0.7730台まで小幅下落して引けた。14日、0.7730台で取引開始後、パウエルFRB議長講演を控えた様子見から0.77半ば近辺でレンジ推移。パウエルFRB議長講演を控えて、ハト派的なコメントを期待する向きによる米ドル売りが持ち込まれ、豪ドルは買い優勢となり一時0.78を超えた。講演で実際にハト派的な発言が出てくると、米ドルが買い戻される動きに、豪ドルは0.7780台まで下落して引けた。15日、米株先物などが軟調に推移し、ドルがじり高となる中、豪ドルは一日を通して0.77台後半から0.76台後半まで右肩下がりに推移した。

今週は軟調な推移を予想する。先々週に一時2018年以来の0.78台乗せまで上昇したが、足許は米ドル買い戻しの動きに押されて0.77台で推移。豪ドル/円も、2019年以来の80円台回復に達成感が出てくるだろう。また、新型コロナウイルスの感染拡大は引き続き収まる気配はなく、先週はアジア圏ではマレーシアが緊急事態宣言を行ったほか、欧州でもドイツが4月までロックダウンを延長する方針を示すなど、世界景気には向かい風が続く。こうした状況下、豪ドルの上値は限られそうだ。尚、21日(木)に豪12月雇用統計、22日(金)に豪12月小売売上高の発表が予定されている。いずれも前回比軟調な結果となることが予想されているが、RBAは当面の間利上げは行わないことを示しており、相場への影響は限定的となろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(1/11～1/15)の値動き:　(対ドル) 安値 0.7667　高値 0.7805　終値 0.7704
(対円) 安値 79.72　高値 80.86　終値 80.01



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。